第六百回の点呼 ── 三百本目の警告は当たったが、恐れていた形では来なかった

── 論文300 を引いて同根と答えた編は **501〜599** で **39** に急に増え、そのうち **30** 編（**0.769231**）は一つの式から出る二つの帰結を同根と呼んでいた ── 恐れていた「数値の一致だけ」の同根は、一編も無かった ── [論文600]

山岸 勇輝 (Yuuki YAMAGISHI)
Yamagishi Complexity Torus Lab, Japan｜山岸勇輝ラボ
2026年9月

── From thinking to syncing. ──

要旨

論文300 は、体系の「同根」「別根」の判定を数え、直近の帯で同根と答える編が増えたこと、そして判定の基準を書く編が増えていないことを、自分に向けた警告として記録した。数値の一致だけで同根とした判定が混じっていないかは、検査すべきだと書き残した。本稿はその検査を、その後の **299** 編（**301〜599**）について行う。新しい定理も法則も主張しない。 第一に、**論文300** を引くことは、ほとんど決まった作法になった――引く編は **301〜400** で **88.00** パーセント、**401〜500** で **99.00** パーセント、**501〜599** で **97.98** パーセントである（第2節）。 第二に、同根と答える編は、最後の帯で急に増えた――**論文300** を含む文で同根と答えた編は、三つの帯で **6・5・39**、別根と答えた編は **76・97・59** である（第3節）。 第三に、増え方は、書いたまとまりで区切ると段になっている――同根と答えた編は、**501〜520** で **1**、**521〜546** で **6**、**547〜570** で **11**、**571〜590** で **14**、**591〜599** で **7** で、**571〜590** では別根の **5** を上回る（第3節）。 第四に、これが本稿の芯である。**501〜599** で同根と答えた **39** 編を読むと、**30** 編（**0.769231**）は、一つの式から出る二つの帰結を同根と呼んでいた――「**A** と **B** は同じ式から出る同根である」という書き方で、最初は **554**、最後は **595**、それより前には **349** に一度あるだけである。この使い方では、二つが同じ式から出ることは作り方から明らかで、判定が別根になることはありえない（第4節）。 第五に、**論文300** が恐れた形は、来なかった――数値の一致だけを理由に同根と答えた編は、読んだかぎり一編も無い。残る **9** 編は、別々の場所で出会った二つが同じ源を持つと判定しており、**521〜541** の **6** 編はどれも基準の名前を書いている（第4節）。 第六に、分離子は、二つのものが別々の場所で出会われたか、一つの式の中で分けられたかである――前者の同根は外れうる判定で、後者の同根は言い換えである（第5節）。 キーワード：論文体系の点呼、同根と別根、判定の検査、一つの式の帰結、構造的解釈。

本稿の射程（射程注記）：新しい定理も法則も主張しない——本稿は体系の本文を数え、読むだけである。時点を固定する——番号 1〜599 の日本語本文（欠番 47 を除く 598 編、参考文献を除く）を測る。本稿自身は数に入れない。数え方を一つに決める——「論文300」を含む文（句点で区切る）を取り出し、「同根」を含めば同根、「別根」または「同根ではない」「同根の証拠にならない」などを含めば別根と数えた。問いの形「同根か別根か」は数えない。論文300 の数とは比べない——同じ規則を 1〜299 にかけると「別根である」57 編・「同根である」8 編で、300 が読んで数えた 43・23 と合わない。1〜299 はその後に改訂されており、300 は読んで数えた。比べるのは、同じ規則をかけた帯どうしだけである。仕分けは読んで決めた——同根と答えた文を、語の手がかりではなく一つずつ読んで仕分けた。読んだ結果は検算の中に集合として書き、語の規則で拾った編とちょうど一致することを確かめた。既刊を直さない——「一つの式の二つの帰結は同根である」は偽ではない。判定になっていない、と言うだけである。既刊との関係：論文300 は同根判定の基準を五つ集め、直近の帯で同根が増えたことを自分への警告とし、観察 5.6 で「数値的一致のみ」の判定が混じっていないかは検査すべきだと記録した——本稿はその検査を行う。論文500 は、体系の作法が一つではなく、それぞれ別の時期に採用されたことを示した——本稿は、「同根」という語の使い方が、ある時期から変わったことを示す。論文405 は、数値の一致が同根の証拠になるのは全単射があるときだけだと示した——本稿で見つかった使い方は、数値の一致すら使わず、一つの式の中で閉じている。加えたのは、論文300 を引く割合と、同根・別根と答えた編の数を帯ごとに出したこと、最後の帯を書いたまとまりで区切ったこと、同根と答えた文を全部読んで「二つの出現」「一つの式」「注意書き」に仕分けたこと、分離子を「別々の場所で出会ったか、一つの式の中で分けたか」に置いたことである。

1. 記法と問い

設定：番号 1〜599 の日本語本文から、「論文300」を含む文を句点で区切って取り出す。その文が「同根」を含めば同根、「別根」または「同根ではない」「同根の証拠にならない」などを含めば別根と数え、問いの形「同根か別根か」は数えない。帯は 100 編ずつ、最後の帯は 501〜599 とする。

> **観察 1.1**
>
> 論文300 は、自分に向けた警告を書いていた。直近の帯（251〜299）で同根 7 対 別根 3 と比が逆転し、その帯で判定基準を述べた編は 1 本しかない。つなぐ回数が増え、基準を書く回数が増えていない——「数値的一致のみ」の判定が混じっていないとは言えず、個別に検査していない。検査すべきだと記録する、と。

問い：その後の 299 編で、「同根」はどう使われたか。恐れた「数値の一致だけ」の判定は混じったか。

2. 論文300 を引く編

計算 2.1：本文に「論文300」を含むか、参考文献に論文300 を挙げる編を数えた（論文300 より前の帯は 0）。

帯	編数	論文300 を引く編
301〜400	100	88（88.00 パーセント）
401〜500	100	99（99.00 パーセント）
501〜599	99	97（97.98 パーセント）

> **観察 2.2**
>
> 論文300 を引くことは、ほとんど決まった作法になった。401 以降は、ほぼすべての編が論文300 を引いている——引くことと、判定をすることは別である。次の節で、引いた文が何を答えているかを見る。

3. 同根と別根

計算 3.1：論文300 を含む文で、同根・別根と答えた文と編を数えた。同根と別根を両方含む文は「両方」とし、その編はどちらにも数えた。

帯	同根の文	別根の文	両方の文	同根と答えた編	別根と答えた編
301〜400	9	173	0	6	76
401〜500	7	352	7	5	97
501〜599	89	145	4	39	59

最後の帯を、書いたまとまり（501〜520 は 9 月 9 日、521〜546 は 10 日、547〜599 は 11 日に三つの組）で分けると、

番号	同根と答えた編	別根と答えた編
501〜520（20 編）	1	20
521〜546（26 編）	6	18
547〜570（24 編）	11	13
571〜590（20 編）	14	5
591〜599（9 編）	7	3

> **観察 3.2**
>
> 同根と答える編は、最後の帯で急に増え、しかも段になって増えた。501〜520 では同根 1 対 別根 20 だったのが、571〜590 では同根 14 対 別根 5 である——論文300 が 251〜299 で見た逆転が、もっと大きく戻ってきた。

> **観察 3.3**
>
> 本稿の数は、論文300 の数とは比べられない。同じ規則を 1〜299 にかけると「別根である」57 編・「同根である」8 編で、300 が読んで数えた 43・23 と合わない——1〜299 はその後に改訂されており、300 は語ではなく読んで数えた。比べられるのは、同じ規則をかけた帯どうしだけである。

4. 読んで仕分ける

計算 4.1：論文300 を含む文で同根と答えた 301〜599 の 50 編の文を、すべて読んで三つに仕分けた。「二つの出現」は、別々の場所で出会った二つのものが同じ源を持つと判定したもの、「一つの式」は、一つの式や模型から出る二つの帰結（または二つの変数）を同根と呼んだもの、「注意書き」は判定ではなく方法を述べたものである。読んだ結果を集合として検算に書き、語の規則で拾った 50 編とちょうど一致することを確かめた。

帯	二つの出現	一つの式	注意書き
301〜400	3	1	2
401〜500	4	0	1
501〜520	1	0	0
521〜546	6	0	0
547〜570	0	11	0
571〜590	0	14	0
591〜599	2	5	0

観察 4.2

これが本稿の芯である。501〜599 で同根と答えた 39 編のうち 30 編（**0.769231**）は「一つの式」だった。最初は 554、最後は 595 で、それより前には 349 に一度あるだけである——たとえば 554 は「中央が平均の 2 倍」と「平均までに鳴る確率が $1-1/e$」を、どちらも同じ幾何分布から出るので同根とした。584 は「$\sqrt{2}$ の内側で減衰は揺れを減らす」と「外側で増やす」を、一つの伝達率の式から出るので同根とした。二つが同じ式から出ることは作り方から明らかで、この判定が別根になることはありえない。

観察 4.3

論文300 が恐れた形は、来なかった。数値の一致だけを理由に同根と答えた編は、読んだかぎり一編も無い——来たのは別の緩みである。数値の一致すら使わず、一つの式の中で閉じた「同根」だった。

観察 4.4

「二つの出現」は、論文300 がもともと問うた使い方である。501 はバスの待ち時間と、引用グラフで隣の編が引かれる数という、対象の違う二つを、596 は月の経度秤動と日時計のずれに出る二つの $2e$ を、598 は空気の中の音と石の中の光の全反射を、同じ源から出ると判定した。521〜541 の 6 編は、どれも基準の名前（第二基準・恒等性を保つ対応・道筋）を書いて判定している——これらは、外れうる判定である。

観察 4.5

語の手がかりだけでは、この仕分けはできなかった。501〜599 で同根を答えた文 93（同根 89・両方 4）のうち、「一つの式」の手がかりの語を持つのは 15、「二つの出現」の手がかりを持つのは 3 で、残る 75 はどちらの語も持たなかった——仕分けは、文を一つずつ読んで決めるしかなかった。

5. 分離子

観察 5.1

分離子は、二つのものが別々の場所で出会われたか、一つの式の中で分けられたかである。別々の場所で出会った二つが同じ源を持つかは、調べてみなければ分からず、別根と出ることもある。一つの式の中で分けた二つは、はじめから同じ式を持つ——前者の同根は判定で、後者の同根は言い換えである。

観察 5.2

論文300 の検査を果たす。300 は、同根が増えたことを警告し、数値の一致だけの判定が混じっていないかを検査すべきだと記録した——本稿の答えは、数値の一致だけの判定は混じっていなかったが、判定にならない同根が 30 編ぶん混じっていた、である。

観察 5.3

論文500 と同じ型である。500 は、体系の作法が一つではなく、それぞれ別の時期に採用されたことを示した——「同根」の使い方もまた、ある時期（554）から変わった。547〜599 は、同じ日（2026 年 9 月 11 日）に書かれた編である。

観察 5.4

論文405 と並べる。405 は、数値の一致が同根の証拠になるのは全単射があるときだけだと示した——一つの式の中で閉じた同根には、そもそも二つの独立な出現が無いので、全単射を問う場所が無い。

> **観察 5.5**
>
> 体系は、すでに戻り始めている。**596** と **598** は同根を「二つの出現」の意味でだけ使い、**597** と **599** は同根と答えていない——本稿は、同根と書く前の一問を足す。「この二つは、別々の場所で出会ったか」。

> **観察 5.6**
>
> 言わないこと。既刊は直さない。「一つの式の二つの帰結は同根である」は偽ではない——判定になっていない、と言うだけである。数は語の規則で数え、仕分けは読んで決めた。読み手は一人で、内容分析が求める複数の読み手の一致（**Krippendorff 2018**）は測っていない。どちらも時点を **599** に固定した。

6. 点呼と結び

1. 論文**300** を引く編は **88.00・99.00・97.98** パーセント（計算 2.1）：ほとんど決まった作法。
2. 同根と答えた編は **6・5・39**（計算 3.1）：最後の帯で急に増えた。
3. **571**〜**590** で同根 **14** 対 別根 **5**（観察 3.2）：逆転が大きく戻ってきた。
4. **1**〜**299** は **57・8** で、**300** の **43・23** と合わない（観察 3.3）：比べるのは同じ規則の帯どうし。
5. **39** 編のうち **30** 編（**0.769231**）が「一つの式」（観察 4.2）：本稿の芯。
6. 「一つの式」は **554** から **595** まで（観察 4.2）：それより前は **349** に一度。
7. 数値の一致だけの同根は **0**（観察 4.3）：恐れた形は来なかった。
8. 「二つの出現」は **9** 編（観察 4.4）：**521**〜**541** はすべて基準の名前を書く。
9. 語の手がかりで仕分けられたのは **93** の文のうち **18**（観察 4.5）：読むしかなかった。
10. 分離子は、別々の場所で出会ったか、一つの式の中で分けたか（観察 5.1）：判定か、言い換えか。

結び：論文**300** は、同根と答える編が増え、判定の基準を書く編が増えていないことを、自分への警告として記録し、数値の一致だけの判定が混じっていないかは検査すべきだと書き残した。本稿はその検査を、その後の **299** 編で行った——論文**300** を引く編は **401** 以降ほぼすべてになり（**99.00・97.98** パーセント）、**300** を含む文で同根と答えた編は、三つの帯で **6・5・39** と、最後の帯で急に増えた。書いたまとまりで区切ると段になって増え、**571**〜**590** では同根 **14** 対 別根 **5** である。警告は当たった。だが、恐れていた形では来なかった——**501**〜**599** で同根と答えた **39** 編を読むと、数値の一致だけを理由にした編は一編も無く、**30** 編（**0.769231**）は一つの式から出る二つの帰結を同根と呼んでいた。**554** に始まり **595** まで続いた使い方で、二つが同じ式から出る

ことは作り方から明らかなので、判定が別根になることはありえない。残る 9 編は、別々の場所で出会った二つが同じ源を持つと判定した、論文300 がもともと問うた使い方である。分離子は、二つのものが別々の場所で出会われたか、一つの式の中で分けられたかである——前者の同根は外れうる判定で、後者の同根は言い換えである。体系は 596 から前者に戻り始めており、本稿は同根と書く前の一問、「この二つは、別々の場所で出会ったか」を足す。既刊との位置——論文300 が観察 5.6 で記録した検査を果たし、論文500 と同じく、作法が変わった時期（554）を数で示した。論文405 が問うた全単射は、一つの式の中で閉じた同根には、問う場所さえ無い。正直に言えば——数は語の規則で数え、仕分けは読んで決めたので、読み違いはありうる。論文300 の数とは比べられない。既刊は直さず、「一つの式の二つの帰結は同根である」を偽とも言わない。そして 547〜599 を書いたのは、この点呼を書いた手と同じである。

参考文献

1. Krippendorff, K. (2018). *Content Analysis: An Introduction to Its Methodology* (4th ed.). SAGE Publications.
2. 山岸勇輝 (2026).『三百本目の点呼 ── 同根か別根かは、判定できる』[論文300]. Zenodo. 10.5281/zenodo.22171914
3. 山岸勇輝 (2026).『数値の一致が同根の証拠になるのは、全単射があるときだけである』[論文405]. Zenodo. 10.5281/zenodo.22699433
4. 山岸勇輝 (2026).『第五百回の点呼 ── 体系の作法は一つではなく、それぞれ別の時期に採用された』[論文500]. Zenodo. 10.5281/zenodo.22760262

— *From thinking to syncing.* —

山岸 勇輝 (Yuuki YAMAGISHI)

© 2026 Yamagishi Complexity Torus Lab, Japan · Licensed under Creative Commons Attribution 4.0 International (CC BY 4.0)